

「Practical Gastrointestinal Endoscopy」 4th ed

edited by P. Cotton, C. Williams

愛知三の丸病院院長

小 林 世 美

Cotton と Williams に よる「Practical Gastrointestinal Endoscopy」の第 4 版が出た。初版は 1980 年の発刊だから、その評判のほどがよくわかる。

著者の 2 人は、いずれも 1970 年代前半にその名が斯界に知られはじめた、英国を代表する international endoscopist である。Cotton は 1971 年に訪日し、新潟県がんセンターと愛知県がんセンターで ERCP を見学して、帰国後早速応用し、その後英国で ERCP の牙城を築いた。現在は米国の South Carolina 医大で教鞭を執るかたわら、米国内視鏡学会で活躍している。Williams は早くから大腸疾患で有名なロンドンの St. Marks 病院に勤務し、1970 年代初頭に武藤徹一郎博士と共に大腸ポリペクトミーを始めた。以後研鑽を積み、独自の大腸内視鏡学を確立した。2 人が本書を書いたきっかけは、1970 年代後半に登場した数々の内視鏡的治療法を消化器内視鏡における一大変革としてとらえ、技術開発

における先達として、それらの技術を後進に伝えておきたかったからである。以後第 4 版 (1996) に至る 16 年間に超音波内視鏡、腹腔鏡下胆摘術などの進歩があったが、それぞれに詳しい解説書が世に出ているので、本書には含めず、第 3 版をもとにその後の新治療法を若干追加するにとどめている。

内容としては、5 章の“上部消化管における治療”(狭窄解除術、異物除去、止血法、栄養療法など)、7・8 章の“ERCP とその関連治療法”(乳頭切開術、胆石除去術、胆道拡張術、ステント挿入術など)、10 章の“大腸ポリペクトミー”が重点的に書かれている。更に欧米での常として厳格なる適応の決定、このことは消化器診療の中での内視鏡の正しい位置付けに重要である。また、検査の安全性と偶発症予防のための前処理、投薬(鎮静剤など)、モニタリングに多くの頁を割いている。筆者の米国での経験では、鎮静剤投与が当たり前であったが、偶発症中死亡事

故で最も多いのはそれらの薬物投与による呼吸抑制によるもので、鎮静剤などの安易な使用を厳に戒めている。更に informed consent の重要性が強調されている。丁寧な説明が検査の安全と成功に導くと述べ、内視鏡がルーチン検査になった今日、患者側の懸念が軽視されがちであるという。

そのほかの長所として最近 A4 判の書が多いが、本書は B5 判で手軽であること。技術解説はすべて美しいイラストで示され、親しみやすい。英文を読み慣れない人は文字の多いのを敬遠しがちだが、本書は英語圏以外の読者を意識してか平易な英語で書かれ、医学用語さえ知っておれば、ほとんど辞書なしで読める。初心者のみならず expert にとっても、本書を通して欧米の合理主義に裏打ちされた実地的内視鏡学から学ぶことは多い。

● 352 pp. 451 figs. 1996 ￥9,770

IGAKU-SHOIN Medical Publishers, Inc., New York (取り扱い 医学書院洋書部 ☎ 03-3817-5670)